



心に灯った“ありがとう”が導いた、介護への道 言葉に救われ、喜びに出会った—そんな“ありがとう”の物語



職員A（インタビュアー）

これまでどのような仕事をされてましたか？

スーパーのお花コーナーに向けてお花を卸す業務に従事していました。その他にも建設業で、公園や住宅の建築に携わったり、経理事務にも務めたりしたことがありました。



F・M様（インタビューイ）



なぜ介護の道に進もうと思ったのですか？

同級生の親友から「介護の仕事をしてみないか」と誘われたことがきっかけです。
これまでに3回誘ってくれていたのですが、最初の2回は断っていました。当時は建設業や事務の仕事がとても楽しく、何より私自身、認知症の祖母の介護を経験していたため、大変さを知っており「自分には絶対に無理だ」と思っていたからです。
それでも介護職に進むことを決めたのは、3回目に誘われたタイミングがちょうど祖母の葬儀中で、何かの“縁”を感じたこと、そして「他の仕事にも挑戦してみたい」という思いが重なったためです。
この出来事が、介護の世界へ飛び込む決意につながりました。



介護職に勤めるにあたって不安とか葛藤はありましたか？

介護に対して凄いトラウマがありました。20代前半の頃、母子家庭で一歳の子供の子育てと認知症の祖母の介護に日々追われていました。余裕もなくつい「おばあちゃんなんかいなかったら良かったのに、」とポロッとやってしまったことがありました。その後施設に入ったが一年で亡くなってしまいました。やってしまった後悔や日々色んな事に追われていた事もあり、一度も会いに行けませんでした。この経験がトラウマとなり、介護職に対して拒絶反応がでたりしていました。



それでも介護職に就かれ、続けてこられたのは一体なぜだったのでしょうか？

最初はトラウマもあり、辞めたいなと思ったことは何度もありました。ただ利用者の方と接していく中で、自分を必要としてくれたり、待っていていてくれたことも多々ありましたし、何より心からの感謝の言葉だったり、言葉を発する事がままならない人が、笑顔になる姿を見て、ここで利用者の方の最後を看取っていくことが祖父への後悔の払拭だったり、親孝行になるのではないかと思います。仕事で辛いことやしんどい事があっても乗り越えて、続けてこれました。



とても重い経験をされてきた中で、それでも続けてこられた理由が 凄く伝わってきました。辛さや迷いがありながらも、利用者さん一人ひとりと向き合っただけでいいですね。お話を聞いていると、このお仕事が単なる仕事以上の存在になっていったように感じました。そうした経験を通して、この仕事の一番のやりがいとはどんなところだと感じていますか？

この仕事のやりがいは、家族以外の存在でありながら、家族に近い関係を築き、その方の人生の最期を看取ることができることだと思います。

病院ではなく、施設で最期を迎えられる方も多く、長い時間を共に過ごしてきたからこそ、看取りの瞬間は決して楽ではありません。それでも、その方の人生の最期に寄り添えることは、この仕事でしか得られないやりがいだと感じています。

また、この仕事は辛いことばかりではありません。テレビを見るよりもずっと面白く、楽しい瞬間もたくさんあります。今日も利用者さん同士の漫才のようなやり取りに、思わず笑ってしまいました。



大変な場面もありますが、その方の人生の最期に寄り添え、日々の関わりの中で笑い合える瞬間もある。介護の仕事には、人と深く関われる大きな魅力があります。最後に、これから介護職を目指す方へメッセージをお願いします。

私も未経験から介護の仕事を始めましたが、本当に良かったと感じています。何も知らなかったからこそ見えてきたことが、たくさんありました。子育てを終えた方、短時間でも働きたい方、人の役に立ちたいという思いをお持ちの方、大歓迎です。ぜひ一度足を運んでいただき、介護の仕事に触れてみませんか。